

中島敦『D市七月叙景（一）』論

― 異種混淆の植民地表象を中心に ―

はじめに

中島敦（一九〇九―一九四二）は、その生涯を通じて数多くの植民地体験に基づいた作品を残している。「関東州」租借地の主要都市である大連を舞台とした『D市七月叙景（一）』（以下、『D市』）の場合は、中島が一高在学中、大連二中で教諭を務める父を見舞った際の見聞や療養所で耳にした南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）についての噂をもとに、止められない吃逆に悩まされる退職直前の「M社」総裁Y氏、海水浴場で休日を通す社員家族、無銭飲食で打ち据えられる失業苦力のそれぞれを主人公とした三つの物語で構成され、一九三〇年一月中編小説として『校友会雑誌』三二五号に発表された。

表題の「D市」と「M社」は「大連」と「満鉄」の頭文字を暗号化した表現であり、またY氏という人物は、当時の満鉄総裁・山本条太郎がモデルと推測される。文末では「（未完）」がつけられたが、その後の大学時代、中島は創作から遠ざかり休筆していた。その原因は発表舞台（『校友会雑誌』）を高校卒業で失ったためや、朝鮮や中国の悲惨な現状を描くことが検閲の面で不安な点があったためと藤村猛は主張している。^③

閻 正 昊

『D市』をめぐる植民地表象論については、先行研究では創作素材と作品における植民地批判の視点が大きい。例えば、佐々木充は「叙景」ということが「たちまち現実批判・告発になってゆく道筋が、ここにはもう見えている」と作品の批判性を評している。^④川村湊は『D市』での「被植民階級と植民者の階層とは、やや図式的な対立としてとらえられているというべきかもしれない」と物語における対立的階層性を指摘し、また宗主国民である日本人の生活に「忍び寄ってくる不吉なもの影、*“植民地生活”* そのものに本質的に内在しているようなメランコリーや怯え、恐怖や不安もそこにはあった」と、植民地生活の本質を指摘している。^⑤安福智行は満鉄の「御用」新聞と見なされる『満洲日報』を考察対象に、作品が「『満洲日報』という新聞を題材にして、上層・中層・下層階級を象徴する人物を抽出し、それぞれにテーマを設定して描いた」と指摘している。^⑥小谷汪之は、中島が中国人苦力たちと直接に言葉を交わさなかったが、「彼らの苦境にあえぐ姿は到る所に見られたのであろう。〔中略〕彼らの窮状の背景にある大連の経済状況をリアルに描いて」、「日本や朝鮮や中国の政治の動きや社会的、経済的状况に広く目を配っていた」と中島の植民地情勢への注目および物語の成立への影響を示唆している。^⑦

先行研究では、中島の植民地社会への関心、およびそれを物語化する姿勢を軸に、作中の植民地表象に焦点を当てて、作品の構成と物語における批判性をめぐって分析したものが多くあり、また物語における植民地社会の諸民族像も、階級間の格差から分析されてきた。しかし、中島の初期作品としての『D市』における作家の植民地体験による創作意識を軽視し、従って作中の植民地表象をその階級性や批判性しか取り扱わない論調は、前述の諸視座を見て分かるように、物語における植民地風景の異種混淆性への関心の低さを露呈している。

それらの先行研究では、植民地の社会と階層の描写に注目した視座が多くあるが、その描写における異種混淆性の語り方を明晰にする必要がある。本稿では異種混淆を、階級や支配・被支配の関係と関連している異なる民族や文化が、一つの植民地に混在する状態と定義している。この視点に立てば、異民族・異階級の三つの「叙景」から成る『D市』の物語からは、三つの物語それぞれの内部に描かれた植民地表象の異種混淆性がかがえるため、本稿ではまず中島の大連体験を検討し、その上で三つの「叙景」の異種混淆性を考察したい。

一 異種混淆の植民地大連と中島敦

作品論に入る前に、まず植民地大連の異種混淆性と中島の大連体験を整理する。「満洲」の玄関口と見なされた「関東州」は、そこを拠点とした満鉄と関東庁などの国策会社と統制機関により、日本の「満洲」勢力圏の形成に先行的役割を果たした。

一方、地理学における植民地都市への関心は、宗主国による制度化

の有無を問わない民族別居住分化・宗主国側の意向が反映した都市形態の登場と、ナショナリズムの成立によって、植民地都市の形態や民族別居住分化の変容であると水内俊雄が指摘しているように、^⑧ 植民地大連の地政学における雑種性は、民族によりはつきりと棲み分けられ、^⑨ 宗主国に対し機能的な計画都市としての身分があつたと認められて、それによる異民族・異階級間の文化的差異と不平等な支配政策により、宗主国日本の文化を土台として、元支配者のロシアと、被植民者の中国それぞれの文化とが共存する異種混淆的な言説空間を文学者に与えた。

以上の視点に基づき、植民地大連の異種混淆においては、同一の植民地空間における宗主国民と被植民者の併存、また文化上の「混血」が果たされた。「モダン都市」大連で植民地体験を味わった文学者は、雑種化された社会に併存している多元的な民族・文化・階級への持続的関心が、その「混血」によって高まっていた。そのため、植民地支配体制の構築と変貌を中心に、近代文壇における『D市』の位置づけは、物語化された植民地表象を主軸として再考すべきである。

長期滞在ではない中島の「満洲」体験は、「旅行」と「居住」との間の、「一時的な滞在（寄寓）」といったところが、もつとも適切^⑩だと川村湊が論じているように、寄寓により能動的に身につけたことが特徴ともいえよう。その上、「生れは東京。その後処々を放浪。従つて、故郷といふ言葉のもつ（と人々のいふ）感じは一向わかりません」と一九三七年発表の『お国自慢』で述べているように、^⑪ 中島は幼少期の植民地転居による郷土（「お国」）意識の欠如を自認しており、多くの植民地体験を経た自分の生涯を「放浪」生活としている。

中島の植民地体験の一部となる大連体験をまとめると、中学時代の彼は一九二四年の夏、従兄弟とともに旅順在住の叔父を一ヶ月ほど訪ねた。旅行の間に、彼は旅順の戦跡を見学した可能性があると推測される。¹² 父が一九二五年大連に転勤した後、中島は一九二六年から一九三一年まで毎年大連へ帰省し、また年譜によると、一九二七年八月、「帰省中に湿性肋膜炎にかかり大連の満鉄病院に入院、一年間休学することとなった」という闘病生活を過ごした。¹³ 一九二七年頃に執筆された断片の『病気になった時のこと』では、中島は病院から眺めた大連の風景を次のように描き出している。

その向ふ側には大和尚の山々も見えた。そしてすぐ下にはごみごみした支那人町だの、所々に高く立つ洋風の家々の交つた大連の町が見えた。（『中島敦全集』第三巻、三九三頁）

町の隅々にある支那町をのぞいては、大抵は洋館ばかりがそろうて居た。其の間々から、紅獅子と赤くかいた支那煙草の広告だの、所々の公園の立木だの、稀にある日本の寺院だのが覗いて居た。（『中島敦全集』第三巻、三九四頁）

引用文では実写風に大連の風景を描写しており、『D市』における「叙景」の成立を理解することができる。文面の植民地表象を観ると、中島の都市景観への注目にとどまらない意向が分かる。この断片で描写される大連の風景は、植民地における日本人の認識により「文明開化」の象徴である「洋風」の建築を築いてきた景観に限らず、「ごみごみした支那人町」や、「所々に高く立つ洋風の家々の交つた」表現では、民族による居住区の分化と住環境の差異も読み取れる。そして、「紅獅子と赤くかいた支那煙草の広告」と「日本の寺院」の対立をも

つて、中島の「支那」と「日本」それぞれに属する事物の併存、即ち異なる民族文化の混在への強い関心を示している。

夏目漱石『満韓とくろく』（一九〇九）などの日本人による近代紀行文学の大連像では、中国関連の表象が多く言及されているが、それらの異民族のものを「他者」として扱い、また差別的な眼差しで目を向けたものが多い。¹⁴ それと比べて、中島は大連風景を描写した断片において、被支配民族への嫌悪を吐露せずに、現実世界の客観的実在である異種混淆の実態を如実に記録しようと試みた。

以上の考察により、中島は自分の大連体験で認識した異種混淆性に注目していたことが見いだせる。その結果として、多民族・多文化が併存する植民地大連が中島文学において、その異種混淆性への気付きを与える場所であつたことがうかがえる。

二 最高権力者を見る植民地都市風景

ここでも、『D市』第一部分における植民地権力者像と彼が見た植民地風景から、物語の異種混淆性を考察する。冒頭では、中島が一連の対話と動作表現で、「南満洲の王様」と呼ばれる主人公Y氏の「小さな吃逆」で慌ただしい様子を描き出している。

「帽子！」

「ステッキ！」

「オイ、さつさとせんか。」

それ等の言葉を吐き出す間にも、小さな吃逆が、とめどなく胃の底からとび出して来て、彼の言葉を妨げるのであつた。別に急

ぎもしないのに、彼はしきりにいら／＼して夫人や女中達を叱りとばした。（『中島敦全集』第二巻、六五頁）

「M社」の「大総裁」と呼ばれ、植民地権力の核心にいるY氏が登場するや否や、その喜怒哀楽が戯画化されている様子は、第一部分の物語に諷刺的な基調を定着させている。つづいて、「王様」が激しい吃逆に屈伏した様子を次のように描写している。

全く、南満洲の王様も——事実彼は王様に違ひなかつた。関東州だけの行政権を持つて居るにすぎない関東庁長官などの威勢は、とても彼の足下にも及ばなかつた。——此の痛烈な全身的の震動にはすっかり手古ずつて了つた。（『中島敦全集』第二巻、六六頁）

「權威や冷徹さを見せず、却つて吃逆という自分の身体の内部に起こる不随筋の痙攣によつて悩まされ、振り回され、そして自意識によつてコントロールできない状態に陥る」と陳佳敏が評しているように¹⁵、「関東庁長官などの威勢は、とても彼の足下にも及ばなかつた」と、強大な権力を握っていることが提示されているY氏だが、吃逆に「手古ずつて了つた」という表現で、中島は植民地政界で「威勢」を振るう最高権力者の、小さな吃逆で失態を演じる戯画的な植民地風景を描写している。

こういう物語の中で初めて登場した「叙景」は、Y氏が吃逆に悩みつつ「バスカードに乗つて、クッションにどしんと腰を下し」て「M社」に通う時、自動車の中で眺める植民地市街の様子である。

車はロシヤ町から敷島広場の方に出た。（中略）

かつとした日ざしが白い舗道の照り返しと共にアカシヤの街路

樹の葉を萎えさせて居た。その下に休んで居る黄包車には、口をあけたまゝ車夫がぐつたり後によりかゝつて眠つて居た。（『中島敦全集』第二巻、六七頁）

引用文では、「ロシヤ町」から「敷島広場」への路線が設定されている。二つの地名は、植民地大連に実在した日本風の町名であり、当時の大連では日本人居住区が日本風の町名で名づけられたという命名権をめぐる支配の実態を映している。「ロシヤ町」はロシア支配時代に、旧ダルニー市役所を中心に建設された植民地都市の原点であり、Y氏の官邸の原型である満鉄総裁公邸は同町内に位置し、ロシア支配時代の総督官邸を流用している建物であった。一方、「敷島広場」は日本支配時代に建設された広場である。敷島は日本の古い国号の一つであり、また旧日本海軍の戦艦の艦名として広く知られている。¹⁶

「ロシヤ町」から「敷島広場」のほうに出る路線は、総裁官邸から満鉄本社への通路であると事実通りに表現している（図一参照）¹⁷が、



図一 「関東州」大連地図
（一部、地名は筆者が加筆）

二つの地名は、植民地の地名を持つ複数の異文化を示す一方、「（ロシヤ）から（敷島）まで」という植民地支配における宗主国の転換を暗示する作意も読み取れる。さらに、大連体験がない読者にとつては、二つの地名が実在するかどうか分らない可能性があるので、異種混淆の実態と日本の植民地支配権の確立史を、それらの地名で提示した可能性もうかがえよう。

また、引用文で登場した「アカシヤ」と「黄包車」との二つの事物も注目すべきである。アカシヤは、ロシア支配時代から大連で植えられ、その後は大連の代表的な植木として名高い。一方、主に上海で呼ばれた黄包車⁽¹⁸⁾も、植民地の異種性を強めるエキゾチックな表象と見なすことができる。

第一部分の主人公であるY氏の視角から考えると、二つの異種性を表す事物は、その無気力な様子が植民地の権力者を表象し、本部分の諷刺的な基調と相まって、植民地風景を「萎えさせて居た」と感情的に表現する作意が映し出されている。つづいてY氏が「M社」に着いた後、S理事と次の会話をしている。

「どうもK時報は、いかんやうですな。」

「え？」

「どうやら、あの重大事件のことを又誇張して書いてる様です。」

S理事の云ふ所によると、何でもその支那新聞は大きく⁽¹⁹⁾号の見出しで、有名な昨年の事件のことを書いてその下に、又しても例の打倒日本帝国主義を付け加へて居るのだといふのである。

（『中島敦全集』第二巻、六七頁）

引用文では、排日記事が二人が悩んでいる原因だと暗示している。発表時間から観ると、「有名な昨年の事件」は当時真相を隠すために、「満洲某重大事件」と日本政府側に呼称されていた張作霖爆殺事件だと推測できる。物語の中で日本の「満洲」支配に大きく影響した張作霖爆殺事件を、政府側の呼称である「あの重大事件」として登場させ、植民地権力者の悩みの種となっていることは、読者に現実世界における植民地支配の形成史を暗示し、現実と虚構の区別を曖昧にする役割

を担っている。

さらに、K時報を掲載した「打倒日本帝国主義」という権力者に「いかんやう」と否定された排日スローガンが、原文のままで引用されているのも、被支配者の意識面における帝国日本への不服従を明示した上、植民地における宗主国の支配と被支配者の抵抗による軋轢を浮き彫りにしている。

その上、「満鉄を去るに臨み 正副両総裁の挨拶」の見出しで、『満洲日報』夕刊一九二九年七月二十三日付で掲載された山本条太郎の挨拶文が、物語では「諸君がよく先進国民たるの襟度を示して、飽く迄も寛容を持すると共に、その分を知らざる驕傲の態度に対しては深く之を警め、我が権益の守るべきは之を固く守つて、中国国民が信を列強に失ふことを避けしめねばなりません」云々と、語句もほとんどそのままに、Y氏の秘書に頼んだ辞任挨拶の原稿に引用されたと安福智行が指摘している。⁽²⁰⁾

こうした挨拶文の引用は、読者にかつて現実世界で起こった事件への連想を強化する。一方、表現面における役所言葉と話し言葉の混淆は、官僚仕事の煩瑣と人間としての粗末さを示していると同時に、権力者の言説が植民地を支配するための美辞麗句に過ぎないことを暗示し、植民地支配体制の虚偽性を皮肉を込めて表現しているといっても過言ではあるまい。

三 宗主国民一家が送る植民地生活の諸相

第二部分では、東京から「D市」に渡ってきた「M社」社員倶楽部の書記長「彼」と、家族とともに過ごした光景を描写している。「彼」一家は、「D市」郊外にある「外国人の多い海水浴場の近くに家を借りて」、和やかな休日を楽しんだ。本部分の冒頭では、別世界のような美しい海岸風景が次のように見られる。

海にも空にも一面に金色に光る無数の微粒子が躍りながら充滿して居た。のぼせ上つた空は、遠く水平線近くに、ポツと立昇つた硝子の様な水蒸気の層を見せ、「中略」砂の上には翠と朱黄の明るいオーヴァーを着けたロシヤの娘達が三四人、もう、日傘をぐる／＼まはしながら歩いて居た。（『中島敦全集』第二卷、七四頁）

この箇所では、豊かな表現力により、「金色」、「翠と朱黄」などの明るい色彩を携えて、物語の基調を明るくしている。光って踊る「微粒子」、また「硝子の様な水蒸気」などの繊細な比喻表現で、やや冗漫な「叙景」が成立している。また、異民族である「ロシヤの娘達」が植民地港町における海水浴場での登場は、「日傘をぐる／＼まはす動作を伴い」、「叙景」の雰囲気を活発にしながら、異国趣味が溢れた植民地風景の構図を表現している。

遊び終えた後の夕べ、家族と近所のロシア人との交流の中で、次のような二箇所の表現が注目される。

湯殿のすぐ外では、子供達が隣家のロシア人の男の子と一緒に石を蹴つてでも遊んで居るらしい笑声が聞えた。（『中島敦全集』第二卷、七八頁）

丁度その時、窓際に、鮮やかな日本語で、「コンバンハ。」と

声をかけながら、隣家の赤髯のロシア人の顔が現れた。彼は、此の有様に驚いて、わけも分らずに真似をして笑つた。（『中島敦全集』第二卷、八一頁）

中島は、大連と同じく「関東州」に属する旅順に滞在した時、戦跡を見学した可能性があると前述したように、実地体験で日露戦争史を実感したことは十分に想像しうる。物語ではかつて日露戦争の主戦場である「関東州」で、日本人植民者が元敵対者のロシア人と平穏無事に共棲している場面は、読者にかつて勃発した植民地戦争と宗主国転換の歴史を対比しやすくしている。

一方、片仮名で書かれた「コンバンハ。」という日本人支配者の言語が共通語で使われている表現は、異民族として扱われるロシア人の日本語の運用が熟練していないことと、租借権の転換による異種混淆の形成を暗示し、植民地で暮らしている各民族が、植民地の異種混淆性に直面する日常という客観的事実を物語っている。

その後、「叙景」が休日の風景から一転し、「彼」の「内地」において苦悶する「おきまりの下級会社員の生活」の様子を、「裏町の暗い借家、間尺の合はない障子、破れた襖、裏の物干棹にかゝつたおしめ」と描き出し、笑声や笑顔の溢れる「極楽であつた」植民地生活と強烈な対比が形成されている。物語はつづいて、「内地で、一生、いくら勤めた所で、とても、今の自分位の生活はできな^くい」と認めつつも、「彼」の「内地」へ帰還する決意を次のように述べている。

彼は、子供達がもう少し、成長するのを待つて、日本に帰らうとして居るのである。まだ日本を知らない子供達に、彼等の父の生れた国を見せるために、雨戸といふもの、阿屋、築山といふも

のを見せるために、それから、老年は、どうしても彼の故郷の蜜柑と小川と遠い海とのさゝやかな風景の中に小さな家でもたてゝ暮りたいといふ彼自身の如何にも日本人らしい望みのために。

……………（『中島敦全集』第二巻、七九〇頁）

ここでは、「彼」の独白を借りて、「まだ日本を知らない子供達」を「父の生れた国」に帰らせ、植民地にはない風物の「雨戸」「阿屋」「築山」を見せる決心、さらに「故郷の蜜柑と小川と遠い海とのさゝやかな風景の中に小さな家でもたてゝ暮りたい」念願を「日本人らしい望み」と述べて、幸福な植民地生活とは矛盾した心境が示されている。

『D市』の登場人物は、いずれも〈出稼ぎ者〉との性格を持つているため、物語は「〈出稼ぎ〉〈寄生〉」の特質が明らかにされ、彼らの根無草・デラシネの不安定さがはつきりとえられるしかけになつたと鷺只雄が指摘しているように、子供達が知らない日本の風景を引用文で提示したのは、「内地」から来た〈出稼ぎ者〉の一員である「彼は、異郷の「D市」で過ごす生活に幸福を感じている。しかし、「純血」の日本文化を守る宗主国である故郷の生活と大きな差異を感じており、〈出稼ぎ者〉としての「彼」は、異種混淆の植民地生活への帰属感が高いことが、その複雑な心境から読み取れる。

さらに、中島は物語の第一部分で、戯画化された植民地権力者の生活に潜んでいる不安定性を捉えており、本部分でも「そんな幸福にほんとに自分が値するかどうかを臆病さうに疑つて見るものだ」との表現をもって、「南満洲の王様」から一社員までの宗主国民に共有されている不安と、それによる植民地支配への懷疑を読者に伝えている。

最後に注目するのは、「彼の家はクリスチャンであつた」という主

人公の信仰をめぐる設定である。中島文学とキリスト教をめぐる代表的な先行研究の一例を挙げると、奥野政元は、プロテスタント伝道師の叔父・翊（トキ）を生涯尊敬した中島は、断片『病氣になつた時のこと』では「存在の不安といった感覚的実体のうちには、明確に自覚化されないながらも、自己の罪悪という要因が、歴然と認められる」と「狼疾」の全体像が示されており、また後期作品『弟子』の物語における孔子と子路の師弟関係が、「聖書のイエスとその弟子達との関係性にも比較し得る要素につながってくる」と中島文学の宗教的な解説に注目している。²⁴⁾

第二部分の場合には、〈東洋〉における植民地「D市」という舞台に、「彼」一家が「クリスチャン」であるとの〈西洋〉から伝わってきたキリスト教の信者である異種の身分が賦与されている。こういう見逃すことができない設定から物語の筋を辿ると、おそらく『旧約聖書』で述べられたイスラエル人のエジプトでの苦難、またそこからのエクソダスを連想しやすい。「彼」一家は「エジプト」の東京から脱出し、「紅海」の日本海を渡って「シナイ山」にも比べられる「D市」へ移住し、そこで新しい生活を始めると、その経歴をイスラエル人のエジプト脱出が記された「出エジプト記」と照らし合わせることもできるだろう。

こうした物語のプロットに、植民地において外来宗教とも見なせるキリスト教が、「叙景」の一部となつたのは、前述のように第二部分の物語をキリスト教的文化事象から読解できる可能性を示す一方、宗主国民である「彼」一家の信仰と植民地に来るまでの経歴から、「D市」の文化上における異種混淆性も見えて取れる。

四 悲惨な暗面に置かれた被支配階級

第三部分では、二人の失業苦力が「閑散期」に入った「D市」で新たな仕事を探すが見つからず、中国人街で無銭飲食により殴打されるという劇的な物語を書いている。その冒頭で、二人の苦力が働いている埠頭の異色な風景を次のように呈している。

そのスカッパ・ホールからごぼ／＼濁った海に落ちこむ灰色の排水、埠頭の二階から、ハッチの上にのぞきこんだ小型の起重機。塵と芥の淀みの中に繋がれて朽ちかゝった、いくつかのサンパン。〔中略〕風の死んだ此の風景の底に、海は、はげしく日を照りかへして、油の様にトロリと重く淀んで居た。（『中島敦全集』第二巻、八一頁）

埠頭の「叙景」では、呼吸も難くなるような「淀んで居た」景色が描かれ、「灰色の排水」や、「塵と芥の淀みの中」のサンパンなどの汚らわしい描写により、宗主国民の生活環境とは鮮明な対比が示され、植民地風景の不気味な裏面を露呈している。さらに「風が死んだ此の風景」という擬人法で、物語に絶望感を感じさせようとする作意も読み取れる。

二人の失業苦力は、埠頭から中国人街における露天市場の「ひどく蒸れた尿臭のする狭い横町」へ行って、次のような風景を目にする。痔疾や性病の薬の広告の側に、破れた硝子に入れた疾患の局所の模型が列んで居た。うす赤く、肉色をして、所々黄褐色に爛れたその模型の下に、人々は集つて、珍しさうに見上げて居た。商

人と、職人と、苦力と売春婦と、片眼が三四寸もだらりととび出して下つて居る乞食と。彼等は、屠られた豚の血と、金蠅と、青くさく涸れた溝と、黄や赤の煤けた招牌との間をのろ／＼と暑さうに歩いて行つた。道傍では「上海大劇場」と印した芝居の広告ビラの下で、白い豚の腸を、のぼしたり、ちぎめたりして、しきりに洗つて居る男が居た。（『中島敦全集』第二巻、八五頁）

ここに登場した「上海大劇場」の原型を考察すると、「市場正門の右側に「上海大戲院」と云ふ常設映画館が有る。大連に於ける唯一の支那映画館である」という現地日本人による記述や、華字新聞の『泰東日報』に掲載された広告（図二参照）²⁶により、当時大連小崗子の露天市場に位置していた映画館の上海大戲院を原型にした可能性が高いので、中国人街の「叙景」は全くの虚構ではないことが分かる。現実世界で異文化が体験できる場所である中国人街を原型に、中島は「豚の血」「金蠅」「黄や赤の煤けた招牌」などに注目し、それぞれの不潔な表象を不気味な視覚表現として羅列している一方、苦力たちが失業により直面する未知なる運命を、それらの表現にも統合しようとして試みている。



図二 上海大戲院の広告

そうした中国人街の「叙景」では、「痔疾」、「性病」、「うす赤く、肉色をして、所々黄褐色に爛れた」疾患模型や「片眼が三四寸もだらりととび出して下つて居る乞食」などの疾病表象が焦点化されている。宗主国民の生活と比

べて、これらの事物により甚だしく病的な被支配者像が読者に提示されている。近代社会の「文明開化」による「健康と病気を対立させる構造」は、「病原あるいは病氣という「想像的な主体」（マルクス）が制度的に支配しはじめたことが明白である」と柄谷行人が説いているように、不潔と疾病を暴露した第三部分の中国人街「叙景」では、植民地統治における被支配民族の衛生観念の欠如、また医学という現代文明の被支配階級における欠如を冷静な筆調で記録しており、前の二つの物語に登場した宗主国民の生活と鮮明な対立をなしている。

さらに、「疾患の局部の模型」を見ている一員である中国人売春婦の形象が、次のように表現されている。

此のあたりに特に多い売春婦たちも、白粉の斑らな頬をして、之を眺めて居た。曲芸師の猥褻な口上の度毎に、彼女等は面白さうに崩れた齒齦を見せて笑った。（『中島敦全集』第二巻、八五頁）

植民地売春婦像は、中島のほかの初期作品でも表現されておる。例えば、大学時の一九三二年に京城の朝鮮人色街に行った体験がある彼は以後、中学時代を暮らした植民地朝鮮を舞台に『プウルの中で』を創作した。作中では、「描眉毛もうすく、鼻もうすく、唇もうすく、耳も肉がなく、小さかったが、大きな朝鮮人らしくない、く、く、くした眼付が割にその顔を派手にしてゐた」と朝鮮人売春婦少女の顔を描き出している。⁽²⁶⁾

それと比べて、第三部分の失業苦力に「最後の金を出して買」われ、「その女の肌はこんな風に白くて弾力があつた」と、苦力に性的満足を与えた異種混淆の風景の一部となる「D市」の売春婦像は、「白粉

の斑らな頬」や「面白さうに崩れた齒齦」との醜惡な形象が与えられて、また彼女らが「曲芸師の猥褻な口上」を笑う仕草も、嫌惡感を催すように描き出している。中国人街の不潔感を売春婦を通して強調することが、異種感を強めるためであろうと推察できる。

最後に、苦力たちが無銭飲食をする料理店の中の「叙景」も、第三部分で念入りに描かれている。例えば、猫の屍を下処理する場面が次のように書かれている。

料理人は先づ猫の頸のあたりの動脈を切開いた。血が勢ひよく迸り出た。それから彼は、その血だらけの猫の腹を巧妙な手つきで揉み初めた。そして一とほり血を側の桶の中に絞り出してふと、今度は厨刀の先端を猫の下顎に入れて、それをグーツと腹部から尻尾まで切り下げて、肉片のついた尾骨を叩き斬り、かへす刀で、皮と肉との間を二三度器用な厨刀を入れるともう、カバ／＼の皮と真赤な肉片とに分れて了つた。それから四肢の関節を外し、胸壁の中に指を入れて、肺臓を多ぐり出して、腸と一緒に、それを桶の中に投げこんでから、水で一洗ひすると、既に立派な食用肉が出来上つて居るのであつた。（『中島敦全集』第二巻、八六―八七頁）

引用文では、中国人街の料理屋で、日本では常食と認められない血まみれの猫肉が下処理され、食材に至るまでの過程を細大漏らさず描写している。このような描写は、中島の被支配民族へのエキゾチックな認識を示しているとともに、宗主国民である日本人から見た植民地社会の「異種」である中国人の（他者）性を強調する役割を果たしている。一方、下処理の場面を詳しく描いた表現も、搾取されつづける

植民地苦力が、猫肉のように俎上に載せられ、植民者の下処理を待つしかない境遇を暗示している可能性があるだろう。

物語における植民地支配の残酷さが、異種混淆の植民地風景において、汚らわしい中国人街での猫肉の下処理という「殺伐」とした表現から読み取れる。一方、植民地支配に服従しているにもかかわらず、物語の中でも現実世界でも宗主国民の幸福と全く無縁である被支配者の悲惨な運命が、引用文で細かく表現された血まみれの「叙景」とも呼応している。

おわりに

以上の考察では、失態を演ずる最高権力者の目を通して見た異文化の入り混じった「D市」の風景、キリスト教信者である宗主国民が家族と過ごす幸福な休日、また不潔と疾病が満ちている中国人街の無慙な諸相などの、『D市』の三つの部分における植民地表象をそれぞれ取り扱い、追って中島の作意を植民地大連の歴史と作家の大連体験から検討した。先行研究で多く分析されている『D市』物語における植民地支配批判は、本稿の考察を通じて、異種混淆によりさらに問題が鋭角化され、植民地諸民族・階級間格差の暴露により、物語における植民地批判の主要な構成要素になったことが確認できる。

『D市』は、植民地大連の実態に基づき、皮肉を込めて描かれている植民地の最高権力者の苦悩と、入植した宗主国民の幸福な植民地生活に対する懐疑、また被支配者である中国人の不幸な生存状態を物語り、三齣の悲喜劇を通じて多面的な性格を持つ植民地社会の異種混淆

を表現し、さらに異種性を持つ植民地表象の構築により、植民地支配の様相を暴露する努力が見いだせる。

一方、支配権を持つ宗主国民と支配権なしの被支配者の地位・階級による生活上の大きな格差と、被支配者の苦境が無視された不幸な生活環境という権力の有無による格差の形成が、物語でも「D市」の異種混淆性が成り立つ一環であると提示している。

総合すると、物語における幸福と悲惨が交錯した異種混淆の植民地表象が、作家自身の植民地認識と思考に重ね合わせられることで、複雑な描写がなされている。さらに、中島の植民地体制に搾取されている中国人に対する観察も、「叙景」における異種混淆の形成に影響を与えた。一言でいうと、中島が実体験をもとに、深い洞察力をもって注視した民族別居住分化と生活状態の格差などの、植民地大連における民族・階級間の不平等をめぐっては、作品における異種混淆の植民地表象によって、その本質をよりよく描き出そうとする作家の意図がうかがえるだろう。

中島の生涯を觀れば、数多くの秀作が残されている。本稿では『D市』における植民地表象の異種混淆性を考察したが、ほかの中島植民地文学における異種混淆の表現法などのさらなる検討すべき点を、今後の課題として最後に記しておく。

注

- (1) 陸燦は、小説で「大連」という明確な地名をつけないのは、「日本の支配下に置かれる半植民地の都市像の肉付けが、この作品には不要であると判断された」と指摘している。（陸燦『中島敦研究——異空間の探求と

- 表象——『東京外国語大学博士学位論文、二〇一六年三月、二三頁（やまもとしゅうたろう）
- (2) 山本条太郎（一八六七～一九三六）は、越前（福井県）出身の明治—昭和時代前期の実業家、政治家。一九二七年政友会幹事長、満鉄社長（のち総裁）に就任し、「満洲」開発をすすめた。（上田正昭ほか監修『講談社日本人名大辞典』講談社、二〇〇一年、一九九六頁）
- (3) 藤村猛「中島敦「D市七月叙景（一）」論」『安田女子大学紀要』三四、二〇〇六年二月、一頁。
- (4) 佐々木充『中島敦の文学』桜楓社、一九七三年、五七頁。
- (5) 川村湊『異郷の昭和文学』岩波書店、一九九〇年、七七～七八頁。
- (6) 安福智行「「D市七月叙景（一）」論——「満洲日報」を視座として——『京都語文』八、二〇〇一年十月、八三頁。
- (7) 小谷汪之『中島敦の朝鮮と南洋—二つの植民地体験』岩波書店、二〇一九年、一五～一六頁。
- (8) 水内俊雄「植民地都市大連の都市形成—1899～1945年—」『人文地理』五、一九八五年十月、五〇頁。
- (9) 佐藤量「グローバル・シティと植民地都市—大連市の事例から—」『立命館言語文化研究』一、二〇〇七年九月、一一二頁。
- (10) 川村湊『狼疾正伝 中島敦の文学と生涯』河出書房新社、二〇〇九年、八二～八三頁。
- (11) 『中島敦全集』第二卷、筑摩書房、三四二～三四三頁。
- (12) 中島の従妹・荘島褰子は、「敦が京城中学三年の時、大正十三年、震災後の夏休みだったと思いますが、当時大学生だった従兄の関正獻に連れられ、同じ従兄の山本洗と一緒に旅順にいた私ともの家に来た時のことです。一ヶ月程もいたでしょうか」との回想があり（荘島褰子
- 「敦と私」高橋英夫ほか編『中島敦全集』別巻、筑摩書房、二〇〇二年、二三六頁）、郭勇は、「初めて中国へ旅立ったので、聡明で好奇心旺盛な少年の一人の中島敦は、旅順の所々に参観したことが想像できるだろう」とも論じている。（郭勇『中島敦研究——「越境」的文学』上海交通大学出版社、二〇二〇年、七三頁、和訳筆者）
- (13) 「中島敦年譜」『中島敦全集』3、ちくま文庫、一九九三年、四四八頁。
- (14) 朴裕河は、『満韓とくろく』を分析対象に、漱石が見た大連苦力を「汚い」とする視線は「満鉄」＝帝国主義の視線とまったく一致し、また「差異化」＝差別意識と結びついて、日本の帝国主義を支えた「文明」意識は、「清潔度を尺度にして非衛生や不潔を排除する（文明人としての自己確認）」だと批判している。（朴裕河『ナショナル・アイデンティティとジェンダー——漱石・文学・近代』クレイン、二〇〇七年、一三八～一四〇頁）
- (15) 陳佳敏「人間認識の場としての植民地体験——中島敦「D市七月叙景（一）」（1930）を手掛かりとして——」『外国文学』六四、二〇一五年三月、二七頁。
- (16) 敷島とは、(一)大和国磯城郡しきの地。崇神天皇および欽明天皇の都があったという。(二)大和の国をさしている。(三)日本をさしている。(四)和歌敷島道の略と古語で意味している。磯城島とも表記される。（中村幸彦ほか編『角川古語大辞典』第三卷、角川書店、一九八七年、二四頁）現代語では日本全体を指す場合が多い。
- (17) 佐藤定勝『改訂版世界地理風俗大系 満洲帝国篇』誠文堂新光社、一九三七年、四七六頁より転載。
- (18) 黄包车ワンボギーとは、上海で、日本から伝わった人力車を呼んだ語。ワンパウ

- ツ、ワンボツとも表記される。（日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』第二十巻、小学館、一九七六年、七〇六頁）
- (19) 原文一字分欠。ちくま文庫版によると、「大きい活字の意味で「初号と入ったか」と注釈されている。（『中島敦全集』1、ちくま文庫、一九九三年、三四七頁）
- (20) 『満洲日報』掲載の原文は、「諸君が能く先進国民たるの襟度を示して飽く迄も寛容を持すると共に、其分を知らざる驕傲の態度に対しては深くこれを警め、我が權益の守る可きは固くこれを護つて、中国国民が信を列強に失ふを避けしめねばなりません」である。
- (21) 安福智行、前掲論文、七四頁。
- (22) 鷺只雄『中島敦論——「狼疾」の方法』有精堂、一九九〇年、七二～七三頁。
- (23) 「狼疾」とは、『孟子・告子上』の「養^{ツツ}其一指^ノ、而失^{シテ}其肩背^ヲ、而不^レ知也、則為^チ「狼疾人^ノ」也」を出典とし、中島の「現実の世界や人間存在を見失ってしまう人間のこと」、また「他者とは違った「自分」であることの驚き、あるいは孤独感」を指す。（川村湊、前掲書、二〇〇九年、四六～四七頁、訓点は島田鈞一『孟子全解』上巻、有精堂、一九四八年、四四九頁による）
- (24) 奥野政元「中島とキリスト教」勝又浩ほか編『昭和作家のクロノトボス 中島敦』双文社、一九九二年、九〇～九六頁。
- (25) 大野斯文「露天市場考」『満蒙』二、一九二九年二月、八二頁。
- (26) 『泰東日報』第六四八七号、一九二九年五月十六日、五面より転載。
- (27) 柄谷行人『日本近代文学の起源』講談社、一九八〇年、一三六頁。
- (28) 京城時代の同級生である山崎良幸は、「昭和七年、〔中略〕中島君が

京城の私の下宿にやって来ました。〔中略〕夜、「付いて来るな」と言つて自分は色街に行つたらしく、その模様をこと細かに教えてくれました。〔中略〕なお彼は新町の日本人用の方には行かず、韓国人用の方に行つたよう」と回想している。（山崎良幸「中島君を憶う」田鍋幸信編著『中島敦・光と影』新有堂、一九八九年、一八八頁）

(29) 『中島敦全集』第二巻、筑摩書房、二一八頁。

付記

本稿は、二〇二三年度広島大学国語国文学会研究集会（二〇二三年七月八日、広島大学）における発表をもとに、大幅に加筆修正したものである。席上と査読の際、多くの貴重な御意見を頂いた方々に心より感謝を申し上げます。

なお、テキストは『中島敦全集』第二～三巻（筑摩書房、一九七六年）に拠った。引用文中の略・註は、すべて筆者によるものである。引用の際、旧字を適宜新字に改めた。

（えん せいこう、広島大学大学院人間社会科学科博士課程後期在学）